



ゴーリキー

どん底 エゴール・ブルイチョーフとそ
の他の人々 マカール・チュードラ 二
十六人と一人 人間の誕生 ストラース
チ・モルダースチ レフ・トルストイ
ヴェ・イ・レーニン 母

湯浅芳子・横田瑞穂訳

世界文学大系

49

筑摩書房版

世界文学大系 49

ゴーリキー

昭和 35 年 12 月 5 日発行

定価 450 円

訳者	湯横	浅田	芳瑞	子穗
発行者	古	田		晁
印刷者	山	元	正	宜
発行所	株式 会社	筑摩書房		

東京都千代田区神田小川町 2 の 8
振替東京 165768 電話 (291) 局 7651

目次

どん底	湯浅芳子訳	5
エゴール・ブレイチョーフと その他の人々	湯浅芳子訳	54
マカール・チュードラ	湯浅芳子訳	90
二十六人と一人	湯浅芳子訳	99
人間の誕生	湯浅芳子訳	109
ストラスチ・モルダースチ	湯浅芳子訳	116
レフ・トルストイ	湯浅芳子訳	127
ヴェ・イ・レーニン	湯浅芳子訳	164
母	横田瑞穂訳	193
ゴリキーの光	ルイ・アラゴン 小島輝正訳	415
解説	湯浅芳子	422
年譜	湯浅芳子	427

装
幀
庫
田
發

ゴ
ー
リ
キ
ー

どん底

クリグ・オイ・ゾープ
タリリン 荷揚げ人足
 名もせりふも言わない幾人かの浮浪者。

コンスタンチン・ペトロヴィチ・ピャトニ
 ーツキーに捧ぐ

M・ゴリキー

人物

ミハイール・イワノフ・コストウイリョーフ

五十四歳、夜の宿の持主。

ワシリヤ・カールボヴナ その妻、二十六歳。

ナターシャ その妹、二十歳。

メドヴェージェフ ふたりの伯父、警官、五十歳

ワシカ・ペーベル 二十八歳。

クレシチ、アンドレーイ・ミートリツチ 錠前

屋、四十歳。

アンナ その妻、三十歳。

ナースチャ 夜の女、二十四歳。

クワシニャー 餃子売りの女、四十歳近い。

ブブノーフ 帽子屋、四十五歳。

サーチン ほぼ同年配、四十歳近い。

役者

男爵 三十三歳。

ルカー 巡礼、六十歳。

アリョーシュカ 靴屋、二十歳。

第一幕

洞窟のような地下室。重くしい天井。漆喰は剥げおち、くすぶって黒くなった円天井である。光は観客席からと、右側の四角な窓から——上から下へ射してくる——のと。右手の隅は薄い板仕切りで境をしたペーベルの部屋でふさがり、その部屋の戸に近く、ブブノーフの板寝床がある。左手の隅に大きいロシヤ暖炉。左手の右壁に台所へ通じるドア、台所にはクワシニャー、男爵、ナースチャ、が住んでいる。暖炉とドアとのあいだの壁ぎわに幅のひろい寝台があつて、汚らしい更紗のカーテンでかくしてある。到るところ、壁ぎわに板寝床。舞台の前面、左手の壁ぎわに、万力と小さい鉄砦かんしきをとりつけた木の切株、それより少し低いもうひとつの切株。低いほうに、鉄砦を前にしてクレシチが腰かけ、古い錠前に鍵を針金でみている。彼の足もとにはさまざまな鍵を針金の輪に通した大きい束が二つ、ブリキ製のひん曲ったサモワール、金槌、大小のやすり。泊り宿の中央には大テーブル、二つのベンチ、床几一つ、いずれも白木のままでよごれている。テーブルに向かい、サモワールを前に、クワシニャーが主人気取りでいる。男爵は黒パンをしきりに嚙んでおり、ナースチャは床几にかけ、テーブルに肘を突いて、綴じのきれた安本を読んでいる。カーテンで見えなくしてあるベッドで、アンナが咳をしてゐる。ブブノーフは板寝床に腰をかけて、両膝でおさえつけた帽子型に古ズボンの解きはしを当てが、裁ちかたを思索している。そばには眉庇

にする帽子の空箱をひき裂いたボール紙や、蠟引き布のきれっぱし、ぼろきれ、などがある。サーチンは目を覚ましたばかりで、板敷床にねたまうなっている。煖炉の上で、姿の見えない役者がもぞもぞし、咳をしている。

春のはじめ、朝。

男爵 で、それから！

クワシニャー いーえ、いえ、おまえさん、とわたしや言ったのさ、そのことならわたしにはかまわずほかへ行つとくれ。わたしやもうそいつは十分味わいつくしたよ、ってね……そして今じゃもう、脂焼きのえびを百くれようたって、婚礼なんぞするもんかね！

ブブノーフ 「サーチンに」豚じゃあるめえし、なにをブブノーフなってるんだ？

「サーチン喰っている」

クワシニャー わたしや言ったのさ、手前の頭を抑えるものは自分よりない自由な身の上のこのわたしは、なにを好んでひとの籍に入れてもらつたり、むざむざ男の奴隷になつたりするもんか——まっぴらだよ、ってね！ 相手がアメリカの皇太子^{プリンス}だろうと——嫁になんぞいく気はないわね。

クレーシチ うそをつけ！

クワシニャー なにおお？

クレーシチ うそをつけ。アブラムカと婚礼するだろうに……

男爵 「ナースチャの本をひったくり、題名を読む」

『宿命の恋』……「ハッハッハッと笑う」

ナースチャ 「手をのばしながら」かして……返して！ さあ……ふざけないで！

男爵 「本を宙にふり廻しながら、彼女を見ている」

クワシニャー 「クレーシチに」赤毛の山羊め！

おまえまでがおなじように——うそをつけだ——と！ どうしておまえなんぞが、このわたしにそんなずうずうしい口がきけるのよ？

男爵 「本でナースチャの頭を叩きながら」おまえはバカだよ、ナースチャ……

ナースチャ 「本をとり返して」よこして……

クレーシチ どうええ奥方さままだ……だがアブラムカとはおめえ婚礼するよ……そればかり待ってるじゃねえか……

クワシニャー もちろんさ！ そうともよ……

……でなくてさ！ おまえこそ、ごらん、おかみさんをさんざんな目にあわせてよ、半殺しにしてよ……

クレーシチ だまれ、老いばれ犬！ おめえの知ったこっちゃねえ……

クワシニャー へ、へえだ！ ほんとのことを言われたもんだから！

男爵 始まったぜ！ ナースチャ——どうした？

ナースチャ 「頭をあげずに」ああ……あっちへ行て！

アンナ 「カーテンのかげから首を出して」一日が始まったよ！ 後生だから……大きい声をしないで……悪態をつきあわないでくれ、おま

えさんたち！

クレーシチ 泣き言をはじめやがつたぜ！

アンナ 来る日も来る日も……せめて死ぬときぐらい、静かに死なせておくれよ！

ブブノーフ 騒がしくたって——死ぬぶんには差支えあるめえ……

クワシニャー 「アンナのそばに寄って」でもおまえさん、よくもあんなのらくら者と暮らしてきたね。

アンナ ほつといて……あっちへ行て……

クワシニャー よしよし！ ほんにおまえは……我慢強いひとだよ！……どうだね、楽にならなにかね、胸のほうは？

男爵 クワシニャー！ そろそろ市場へ行かなくちや……

クワシニャー 行くよいますぐ！ 「アンナに」どうだね、餃子^{ギョウザ}の熱いのをあげようか？

アンナ 要らない……ありがと。わたしがたべて、どうするのさ？

クワシニャー でもおたべよ。熱いものはくすりだよ。茶碗にとつといてやるからね……気がむいたら、食いなよ！ さあ行こう、旦那……「クレーシチに」へっ、胸くそのわるい鬼め……「台所へ出てゆく」

アンナ 「嘆きこみながら」ああ神さま……

男爵 「ナースチャの襟首をそつと突いて」やめろ……バカ女！

ナースチャ 「ぶつぶつつぶやいて」さっさとお行きよ……あたしやおまえの邪魔はしていかない

わよ。

〔男爵、口笛をふきながら、クワシニヤールのあとを追って去る〕

サーチン 〔板寝床の上に取りあがりながら〕ありやだれだ、きのうおれをなくったのは？

ブブノーフ おめえにや、どうでもいいことやねえのか？

サーチン まあそうしておこう……だがなんのためになくったんだ？

ブブノーフ カルタをやったろう？

サーチン やった……

ブブノーフ だからそれで、ぶん殴られた……

サーチン ち、ちくしょうども……

役者 〔暖炉の上から首を突き出して〕おめえはいちど、すっかり殺されて死んじまうよ……

サーチン おめえはトンマだぜ。

役者 どうして？

サーチン 二度殺すことはできねえからさ。

役者 〔ちよつと黙つて〕わからねえ……どうして——できねえんだ？

クレーシチ おめえ暖炉からおりて、宿の掃除をしな……なにをのんきに納まつてるんだ？

役者 そいつはおめえの知ったことじゃねえ……

クレーシチ でもいまにワシリーサがきてみる——あいつが知らせてくれるぞ、だれの知ったことか……

役者 ワシリーサなんぞ、糞くらえ！ きょうの掃除は男爵の番だ……男爵！

男爵 〔台所から出てきて〕おれは掃除なんぞしてゐる間ねえ……クワシニヤールと市場へ行くところだ。

役者 そんなこと、おれにや関係はねえ……懲役に行こうとどうしよう……床を掃くなあおめえの番だ……おれはほかの者のかわりに働くことはしねえ……

男爵 ふん、勝手にしろ！ ナースチエンカが掃いてくれるさ……おい、きみ、宿命の恋さん！ しつかりしろよ！ 〔ナースチャの本をひたたくる〕

ナースチャ 〔立ちあがりながら〕なにさ？ よこしてよこつちへ！ 悪ふざけばかりして！ しかも——旦那のくせに……

男爵 〔本を返しながら〕ナースチャ！ おれのかわりに床を掃いてくれ——いいね？

ナースチャ 〔台所へ出て行きながら〕それどころか……どういたしまして！

クワシニヤール 〔台所のドアから——男爵に〕おまえは——行きなよ！ おまえがいなくなつて

片づくよ……お役者さん！ みんなの頼みだわね——おまえやつとくれ……まさか骨を痛めることもあるめえよ！

役者 ふん……いつでもこのおれだ……合点がいかねえ……

男爵 〔台所から天秤棒で箆を担ぎ出す。箆の中にはぼろきれて包んだ髪がはいつている〕きょうはなんだか重いぞ……

サーチン 旦那に生まれついただけのことはあ

つたな……

クワシニヤール 〔役者に〕おまえきつとだよ、掃いときな！

〔男爵を先に通して、表口へ出て行く〕

役者 〔暖炉から這いおりながら〕おれは埃を吸っちゃ毒なんだ。〔ほこらしげに〕おれのオルガニズムはアルコール中毒なんだ……〔板寝床に腰を掛けて、考えこんでいる〕

サーチン オルガニズム……オルガノーン……

アンナ アンドレイ・ミートリツチ……

クレーシチ なんだ？

アンナ あつち餃子を、クワシニヤールがとつといてくれたから……おまえさん、おたべよ。

クレーシチ 〔彼女のそばに寄りながら〕おめえは——食わねえのか！

アンナ ほしくない……あたしがたべて何になるの？ あんたは——働いてるひとだし……

あんたには——要るもの……

クレーシチ しんべえしてるのか？ しんべえすることあねえ……もしかすりやまだ……

アンナ 行つて、おたべよ！ あたしや苦しくて……きつと、もうすぐ……

クレーシチ 〔そばを離れながら〕なあに……もしかすりや——起きられるよ……よくあることよ！ 〔台所へ出てゆく〕

役者 〔声高く、突然目を覚ましたように〕きのう、診療所で、医者がおれに言ったのさ、きみのオルガニズムは、つてね、——すっかりア

ルコール中毒です……

サーチン 「にやにやしながら」オルガノーンだ……

役者 「頑として」オルガノーンじゃない、オル・ガ・ニー・ズム……

サーチン シカームブル。

役者 「あきれて手をふり」えッ、世迷言はよしてくれ！ おれは言ってるんだよ——まじめに……そうさ。オルガニーズムが——中毒してるとすると……つまり、——おれは床を掃いちゃ毒だ……埃を吸っちゃ、な……

サーチン マクロビオーチカ……はッ！

ブブノーフ なにをぶつぶつ言ってるんだ？

サーチン 言葉さ……まだあるよ——トラン

ス・スツエデンタリヌイ……

ブブノーフ そりやなんだ？

サーチン 知らねえ……忘れた……

ブブノーフ じゃ、それを言って何にする？

サーチン まあね……おれはもうほとほといやになったんだよきみ、人間の言葉という言葉がみんな……おれたちの言葉というものがみんな——ほとほといやだ！ の言葉もそれぞれ、きつと、千べんは耳にしたろう……

役者 「ハムレット」のしばいの中に「言葉、言葉、言葉！」と言うところがあるよ。いい作品さ……おれはあんなかで墓掘りの役を演じたよ……

グレーンチ 「台所から出てきて」箒を持ってやる役は、もうすぐ演るかね？

役者 おめえの知ったことじゃねえ……「片手で自分の胸を叩いて」オフエーリヤ！ おお、そなたの祈りのなかにわしのことも祈りそえてたもれ……

「舞台のうしろ、どこか遠くで、——かすかなざわめき、叫び声、警官の呼子。グレーンチは坐って仕事にかかり、やすりをキイキイさせる」

サーチン 意味のわからない、めずらしい言葉が好きさ……おれは小僧っ子のとき……電信局に勤めてたんだ……ずいぶん本を読んだっけ……

ブブノーフ おめえは電信技手もしてたんだろ？

サーチン してたさ……たいへんいい本があるんだよ……またおもしろい言葉もどっさりある……おれは教育のある人間だったんだ……知ってるかい？

ブブノーフ 聞いてるよ……百べんも！ ものの……

サーチン おれは毛皮の加工職人……おれだつてみる——もとは毛皮の加工職人……自分の工場も持っていたさ……おれの手は、そりやもう黄いろかったんだ——染料でさ、おれは毛皮の色づけをやったからね、——そりや、きみ、手は黄いろかったんだぜ——

——肱までよ！ おれや、だから考えてたんだ、死ぬまで洗い落せめえと……こうして黄いろい手をしたまんま死ぬべえと……ところが今はそれ、このとおりよ。なんのこたあねえ……汚らしい手、というだけのことさ……

そうよ！

サーチン ふん、それで？

ブブノーフ なんでもねえ、それだけのことよ……

サーチン おめえ、そりやなんのために言うんだ？

ブブノーフ まあね……もののとえにさ……つまり——外からどんなに色づけしたって、やっぱり剥げ落ちるというわけさ……やっぱり剥げ落ちるんだ、そうよ！

サーチン だが……おれは骨が痛むよ！

役者 「両手で膝を抱えて坐っている」教育なんぞ——知れてるよ、要するに——才能さ。おれの知ってた俳優でね……役なんぞ、綴りをたどってやつと読むんだつたけれど、主役を演る段になったら……有頂天になった見物のどよめきで劇場が割れかえって、ぐらぐら揺れたもんだよ……

サーチン ブブノーフ、五カペイカ玉よこせよ！

ブブノーフ おれは二カペイカあるきりだ……役者 おれは言うよ——才能だと。主役に要るものはそれさ。でも才能というものは——こりや自分への信念だよ、自分の力への……

サーチン 五カペイカ玉くれよ、すりゃおれはおまえを才能とでも、英雄とでも、鰐とでも信じてやるよ、警察の分署長とでもな……グ

レーンチ、五カペイカ玉よこせ！

グレーンチ うせやがれ！ そんなやつばかり

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

うようよしてやがって……

サーチン なにを悪態ついてるんだ？ おめえは一文だつて持つちやいねえんだろうが、おれや知ってるぞ……

アンナ アンドレーイ・ミートリツチ……わたしや息ぐるしい……つらい……

クレーシチ といって、おれがどうすべえ？

ブブノーフ 表口のドアをあけてやれ……

クレーシチ よろしい！ おめえは板寝床に腰かけてるが、おれは床の上だぜ……おれはこのままにしといてくれて、おめえ開けてくれよ……ただせえおれや風邪をひいてるんだ……

……

ブブノーフ 「落ちつきはらつて」おれは開けてなんどいらねえ……おめえのかみさんがたのんでるんだ……

クレーシチ 「陰気に」ひとがものを頼むのをいぢいぢいいていられるか……

サーチン 頭がガンガンする……あッ！ だがなんのために、ひとはみんな頭をなぐり合うんだ？

ブブノーフ 頭にかぎりやしねえ、ほカンとも、体じゅうおかまいなしよ。「立ちあがる」ちよつと行つて、糸を買つてくべ……ときにここの亭主どもは、どうしてかきようはちつともあらわれねえな……どうやらくたばりやがつたらしいて。「出てゆく」

「アンナが咳きこむ。サーチンは両手を頭の下にかつて、じつと動かさず横になっている」

役者 「悲しげにあたりを見回してから、アンナのそばに寄る」どうだね？ よくないか？

アンナ 息ぐるしい。

役者 よかつたら——表口へつれ出してやろうか？ さあ、立ちな。「助けて女を立たせ、なにかひどい着ふるしを肩にひつけてやり、体を支えてやりながら表口へつれて行く」そう、そう……

……しつかりと！ おれだつて——病人なんだ……アルコール中毒なんだ……

コストウイリョーフ 「戸口のところで」ご散歩か？ なるほど、こりやい夫婦だ、牡羊に牝羊か……

役者 かれこれ言つてねえで——どいてくれ……わかるだろ？ 病人同士が行くところだ……

……

コストウイリョーフ さあさあ通りな……「なにか教会の歌らしいものを鼻でうたいながら、うさぐさうさうに宿を見まわし、ペーベルの部屋の中に、なにか聞き耳を立てるらしく、首を左にかしげている。クレーシチは猛烈に鍵束をガチャつかせ、上目で亭主の様子を見まもりながら、やすりをキイキイいわせている」キイキイやつてるのか？

クレーシチ なに？

コストウイリョーフ キイキイやつてるのか？ と言つたんだ。「聞」えエーと……あれだ……おれはなにを訊こうとおもつたんだつてな？

「早口に、声低く」家内はここに來なかつたか？

クレーシチ 見なかつたな……

コストウイリョーフ 「用心ぶかくペーベルの部屋

の戸口に近寄つて行きながら」月にたつた二ル

ーブルで、おめえはずいぶん場所を占領してるぞ！ 寝台ときてる……そしておめえはそこに坐つてる……ん、そうだ！ 五両がそこ

はあるぜ、ほんとに！ おめえには半ループル、割増しをかけなきやなるめえ……

クレーシチ おめえ、おれには首なわをかけてくれ、そして絞め殺せ……もうじきおめえもくたばるだろうに、なにかといや半ループルのことばかし考えやがって……

コストウイリョーフ おめえを絞め殺してなにになる？ そんなことをしてだれの利益になる？ せいぜい機嫌よく暮らして、分相応に楽しむがいい……おれはおめえに半ループル値上げしてな——お灯明の油を買うんだ……

すると、聖いお像の前におれのお供えの御灯がともる、というわけだ……お供えはおれのために、おれの犯した罪のつぐないにもなるが、またおめえのためにもなるんだ。本人のおめえは、自分の犯した罪のことなんぞ、考えてもいねえからな……そこだよ……やい、

アンドリュシカ、おめえは悪い人間だぞ！

おめえの家内はおめえの悪業がもとで肺病になつたんだ……だれもおめえを好くやつはいねえし、敬うやつもねえ……おめえの仕事はキイキイ音をたてて、みんな気が休まらねえ……

クレーシチ 「どなる」じゃおめえはおれを……

追いたてにきたのか？

……

「サーチンが大声で咆えるようにうなる」

コストウイリョーフ 「びっくりして」 ひゃッ、びっくりした……

役者 「はいってくる」 かみさんを表口に坐らせてきた、よくくるんでやったよ……

コストウイリョーフ ほんにおめえは親切もんだよ、兄弟！ そりゃいい……そりゃみんなおめえに酬われてくる……

役者 いつ？

コストウイリョーフ あの世でよ、兄弟……あそこへいけばなにかも、どんなおれたちのおこないもみんな、ちゃんと精算してくれるのよ……

役者 それよりいまここで、おめえがおれの親切にたいして褒美をくれたほうがいいな……コストウイリョーフ そんなことが、どうしておれにできる？

役者 借金を半分、棒びいてくれ……

コストウイリョーフ へ、へ、へ！ おめえはいつも冗談を言うな、可愛い男だよ、いつもの金と……心根の親切なんてものを金金といっしょくたにできるもんかい？ 親切

というもな——どんな福德よりいちばん高いもんだよ。だがおれにしてもおめえの借金はな、ありゃあれでそのまま借金さ！ つまり、おめえがあれをおれに償すのは当然だ……おめえの親切は、おれのような老人には、報酬なしでしてくれるのが当然さ……

役者 このインチキ爺め……「台所へ出てゆく」

「クレシチが立ちあがり、表口へ出てゆく」

コストウイリョーフ 「サーチンに」 キイキイ屋だね？ 逃げ出したな、へ、へ！ 好かねえとみえるよこのおれを……

サーチン だれがおめえなんぞを——鬼でもなきや——好くもんか……

コストウイリョーフ 「にやにやして」 こりやおめえ、口のわるい男だな！ だがおれはおめえたちをみんな愛してやつて……おれにはわかってるんだ、おめえたちはおれのふしあわせな兄弟なんだ、やくざな、身を持ちくずした……「突然、早口で」ときに……ワシシカは——家にいるか？

サーチン 見てみな……

コストウイリョーフ 「戸口に近寄り、ノックする」 ワシヤ！

「役者が台所の戸口にあらわれる。彼はなににか噛んでいる」

ペーベル だれだ？

コストウイリョーフ おれだよ……おれだ、ワシヤ。

ペーベル なんの用だ？

コストウイリョーフ 「わきへのきながら」 開けてくれ……

サーチン 「コストウイリョーフのほうは見えないで」 あの男は開ける、だがあの女は——あそこで……

「役者、ふっとふき出す」

コストウイリョーフ 「不安そうに、小声で」 え？

だれがあそこにいるんだ？ おめえは……なんてった？

サーチン なに？ おめえは——おれに言ってるのか？

コストウイリョーフ おめえはなんて言ったんだ？

サーチン ありゃあれさ……ひとり言さ……コストウイリョーフ 気をつけた、兄弟！ 冗談もほどどにしろ……そうよ！ 「はげしく戸を叩く」 ワシーリイ……

ペーベル 「戸を開けながら」 ふん？ うるさくなんだ？

コストウイリョーフ 「部屋の中をのぞきこんで」

おれは……そうな——おめえが……

ペーベル 金銭を持ってきたか？

コストウイリョーフ おれはおめえに用事がある……

ペーベル 金銭を——持ってきたか？

コストウイリョーフ どんな金銭だ？ はてな……

ペーベル 金銭さ、七ループル、時計の代、な？

コストウイリョーフ どんな時計だね、ワシヤ？……おや、おめえは……

ペーベル おい、気をつけて言え！ きのう、証人もいるところで、おめえに時計を十ループルで売って……三ループルは受け取った、七ループルよこせ！ なにを目なんぞでパチクリやってるんだ？ こんなところをふらふら

して、みんなのじゃまをしてやがるくせに……
てめえ、じぶんのことのわきまえはねえのか……

コストウイリョーフ レッ！ 腹を立てるなよ、
ワシヤ……時計は——ありや……

サーチン 盗んだものよ……

コストウイリョーフ 「きびしく」おれは盗んだ
ものは受付けねえ……どうしておめえが……

……

ペーベル 「彼の肩をつかんで」おめえは——なぜ
おれのじゃまをしたんだ？ なんの用がある
んだ？

コストウイリョーフ まあ……おれは——べつ
に……おれは出ていくよ……おめえがそんな
ふうなら……

ペーベル さっさと行け、金銭きんせんを持ってこい！
コストウイリョーフ 「出てゆく」なんとという乱
暴な連中だ！ いやはや……

役者 喜劇だね！
サーチン いいね！ こいつがおれは好きな
だ……

ペーベル なんだあいつはここにいたんだ？
サーチン 「笑いながら」わからないのか？ 女
房を探してるのよ……どうしておめえはあい
つをぶちのめさねえんだ、ワシリーイ？！

ペーベル あんなろくでなしのために、てめえ
の一生を台なしになんぞするもんか……

サーチン おめえ——要領よくやるのよ。それ
から——ワシリーサを女房にして……この家

の主人になるんだ……

ペーベル 大したしあわせだよ！ おめえたち
はおれのしんじょうばかりじゃねえ、このお
れまでも、おれの人の善いにつけこんで、

みんな酒場で飲んじまうだろう……「板覆床
に腰を掛ける」老いぼれの鬼めが……目を覚ま
させやがった……だがおれは——いい夢を見
てたんだぜ。たしかおれが魚を釣っていると、

ひっかつたんだよ——でっかいうぐいが
さ！ そのうぐいときたら——あんななあ、

夢でなくちゃみられやしねえ……さあ、そい
つを釣針にひっかけてひっぱるんだが、気が
気じゃねえんだ——釣糸がちぎれそうで！

そこで掬網くくわうを用意してな……さあこれで、い
ますぐ、と思つて……

サーチン それはうぐいじゃねえ、ワシリーサ
だった……

役者 ワシリーサなら、この男はもうとつくに
釣ちまつてるよ……

ペーベル 「怒ったように」てめえら、失せやが
れ……あの女もいっしょに！

クレーシチ 「表口からはいってくる」くそ、寒い
のなんの……話にならねえ……

役者 おめえはまた、どうしてアンナをつれて
きてやらなかったんだ？ 凍えちゃうに……

クレーシチ あいつはナターシカが台所のあの
子のとこへつれてつてくれたよ……

役者 爺が——追い出すぜ……

クレーシチ 「腰をおろして仕事にかかろうとしな

がら」まあ……ナターシカがつれてきてくれ
るよ……

サーチン ワシリーイ！ 五カペイカくれよ……

役者 「サーチンに」えッ、おめえは……五カペ
イカだなんて！ ワシヤ！ おれたちに二
十カペイカ玉、くれよ……

ペーベル はやくくれてやらねえじゃ……ルー
ブル、なんて言いださねえうちに……さ！

サーチン ジブラルタル！ 世の中に泥棒よ
りいいものはねえな！

クレーシチ 「陰気に」らくに金が手にはいる……

……あいつらは……働くわけじゃねえ……
サーチン らくに金の手にはいるやつは多いが、
その金とらくに手を切るやつは多かねえ……

なに、働く？ 働くことがこのおれにも愉快
になるようにしてくれ、おれだって、ひよつ
とすれば、働くかもしれねえ……そうさ！

かもしねえよ！ 労働が快楽でありや——
生活は上々だ！ 労働が義務となると、生活
は奴隷このそれよ！ 「役者に」おい、サルダナ
パロス！ 行こうぜ……

役者 行こう、ネブカドネザル！ うんと飲む
よ——ほらね……うわばみのように、さ……
「ふたり出て行く」

ペーベル 「あくびをしながら」どうだねおめえ
のかみさんは？

クレーシチ きつとながいことはねえよう……

……「間」

ペーベル こうしておめえを見ると、——おめえがキイキイいわせてるなあ無駄骨だぜ。

クレーシチ じゃなにをするんだ？

ペーベル なんにもよ……

クレーシチ じゃどうして食っていく？

ペーベル 暮らしてるぜみんな……

クレーシチ このやつらか？ あいつらがどんな人間だ？ やくざ者や無宿者が……人間か！ おれは——働く人間だ……あいつらを見てると、おれや恥かしい……おれは年端も

いかねえときから働いてる……おめえは思うのか、おれはここからぬけ出せねえと？ 這

い出すよ……生皮をひんむいたって、這い出すよ……まあいまに、待ってな……かかあが

死んだらな……おれはここで半年暮らしてきたが……六年もいたような気がする……

ペーベル ここにいるもなあ、だれひとりおめえに劣る者はねえ……おめえはよけいなことを言うぜ……

クレーシチ 劣らねえと！ 恥も知らなきや、良心もなく暮らしているやつらが……

ペーベル 「無関心に」どこへやるんだそんなもの——恥だの、良心だのって？ 長靴のかわりに足にもはけめえが、恥も良心も……恥や良心なんてもなあな、権力や力を持つてるやつらに要るもんなんだ……

ブブノーフ 「はいってくる」ウー……すっかり凍えたぜ！

ペーベル ブブノーフ！ おめえは良心を持つ

てるか？

ブブノーフ なにを？ 良心？

ペーベル うん、そうだ！

ブブノーフ なににするんだ、良心なんぞ？

おれや——金持じゃねえ……

ペーベル ほうらな、おれもやつぱりそう言ってるんだ、恥や良心は金持に要るもんだって、そうよ！

ところがクレーシチはおれたちをののしって、おれたちにや良心がねえ、と言うのさ……

ブブノーフ じゃこの男は、なにかい——それをつを借りてえとでも言うのか？

ペーベル この男は自分のやつを持つてるよ、どつさり……

ブブノーフ すると、売ってのか？ ふん、ここじゃ、そいつはだれも買わねえ。このとおりボール箱のこわれたやつなら、おれが買ってもいいがな……それも掛買いだ……

ペーベル 「教えるように」バカだよおめえは、アンドリュエシカ！ 良心のことなら、おめえ、サーチンの話でも聴くがいいや……でなきや——男爵のよ……

クレーシチ おら、なんにもあいつらと話すことはありやしねえ……

ペーベル あいつらのほうが——おめえよりか慥巧だろうぜ……のんだくれでもな……

ブブノーフ のんだくれでも慥巧者なら身についた二つの得、さ……

ペーベル サーチンは言ってるよ、人間はだれ

でも、隣のものに良心を持つてもらいたがってるって。な、みろ、そんなものを持つたあ、だれにだって得にならねえのよ……これや——ほんとだ……

「ナターシャがはいってくる。そのあとからルカー、手に杖をもち、背囊をせおい、腰に小釜とやかんをぶらさげて——」

ルカー こんにちは、正直なみなさん！

ペーベル 「口ひげを撫でながら」ああ、ナターシャ！

ブブノーフ 「ルカーに」正直だったこともあるよ、だがおとしの春……

ナターシャ ほらこのひと——新しい宿泊人よ……

ルカー わしにや——いっこうおんなじよ！——わしはインチキ師だって尊敬する、わしに言わせりや、のみ一匹だって——わるかあない、みんな、黒くて、みんな、びよんびよんとぶ……さようさ。娘さん、わしはどこに落ちつけばいいかね？

ナターシャ 「台所へのドアを示しながら」あっちへおいでよ、お爺さん……

ルカー ありがとう、むすめさん！ あっちら、じゃ、あっち……年寄にや、暖かいところ、そこがふるさとさ……

ペーベル おもしろい爺さんをつれてきたもんだね、ナターシャ……

ナターシャ おまえさんたちよりはおもしろいわ……アンドレイ！ おかみさんは台所の、

あたしたちのどこにいるわよ……も少ししたら、迎えにきてくれ。

クレイシチ よし……行くよ……

ナターシヤ おまえさんもさ、こうなったらもすこしあのひとにやさしくしてやればいいのに……もう長いことはないんだもの……

クレイシチ 知ってる……

ナターシヤ 知ってるって……知ってるだけじゃ足りないわ、あんた——わかってやりなさいよ。死んでいくってことはおそろしいことなんだからね……

ペーベル だがおれや、みろ——こわかねえぞ……

ナターシヤ でしょうとも！……勇敢なもんさ……

ブブノーフ 「口笛をふいて」糸は腐ってる……ペーベル ほんとに、こわかねえ！ いますぐだつて——死んでいいよ！ おまえさん、ナイフを持って、心臓を突いてごらん……おら

死ぬよ——声もたてねえ！ それどころか——よろこんでよ、清い手にかかって死ぬんだもの……

ナターシヤ 「出てゆく」ふん、そんな思わせぶりはおかのひとにお言いなさい。

ブブノーフ 「一語一語ゆつくりと」糸は腐ってる……

ナターシヤ 「表口のドアのところで」アンドレイ、

おかみさんのことを忘れないでね……

クレイシチ あいよ……

ペーベル すばらしいむすめだ！

ブブノーフ むすめは——わるかあねえ……

ペーベル どうしてあの子はおれにむかうと……ああなんだ？ 寄せつけない……どっちみち、ここにいや、墮落するんだから……ブブノーフ おめえの手にかかって墮落する……

ペーベル どうして——おれの手にかかって

だ？ おれはあの子を——可哀そうに思ってるんだぜ……

ブブノーフ 狼が羊を不憫がるように……

ペーベル うそつけ！ おれはとも……あの子を可哀そうに思ってるんだ……あの子はここにいやよくない……おれにはわかってる……

クレイシチ 待つてな、おめえがあの子と話してるところをいまにワシリサが見つけるから。

ブブノーフ ワシリサが？ ん、なるほど、あいつは自分のものを只ではわたさねえ……毒々しいあまだ……

ペーベル 「板敷床に寝る」ふたりともとつ

とどうせろ……予言者めら！

クレイシチ いまにわかるさ……待つてな！

ルカー 「台所で口ずさむ」夜オオなかの……み

イイチは見えず……

クレイシチ 「表口へ出てゆきながら」みろ、咆えてるぜ……あれも……

ペーベル 退屈でつまらない……どうしておれ

はときどきこう退屈でつまなくなるんだろ？ ふだんは平気で、万事調子がいいんだ！ それが急に——まるでぞつと冷えこむように、退屈でつまなくなるんだ……

ブブノーフ 退屈でつまらない？ ふむ……

ペーベル ほんとだぜ！

ルカー 「歌う」やれ、みーちイは見えず……

ペーベル 爺さん！ おーい！

ルカー 「戸口からのぞきながら」わしかな？

ペーベル おまえだ。歌わないでくれ。

ルカー 「出てくる」きらいかね？

ペーベル 上手な歌なら、好きだ……

ルカー すると、わしは上手ではないというわけか？

ペーベル そうなるな……

ルカー ほーらな！ ところがわしは、上手に歌ってるつもりだったよ。まあものごとはいつもこんなふうになるものさ。人間は自分じや、考えてる——上手にわしはやってるとね！ ところがどっこい、ひとびとは不服だ……

ペーベル 「声をたてて笑いながら」そのとおり！

ほんとだ……

ブブノーフ 退屈でつまらない、と言ってるかとおもや、そういう自分がハッハッと笑つてやがる。

ペーベル それがどうした？ 大鷲め……
ルカー そりゃだれたね——退屈でつまらない

というのは？

ペーベル このおれさ……「男爵がはいってくる」
ルカー ほーらね！ あそこの台所にも、ねえ
さんが坐って、本を読んでは泣いてるで
う！ほんとよ！ 涙が流れておる……わし
はその子に言うのさ、おまえさん、そりやど
うしなすった？ ところがその子の言うには、
可哀そうなの！ だれが可哀そうなのかね？
ほら、この本のなかに出てくるの……まあこ
んなことにも人間は夢中になるもんさ、な？
これだってやつぱり、きつと退屈でつまらな
いからだろう……

男爵 あれは——バカ女さ……

ペーベル 男爵！ 茶は飲んだか？

男爵 飲んだ……それで！

ペーベル どうだい——半瓶奢ろうか？

男爵 訊くまでもないさ……それで！

ペーベル 四つん這いになって、犬のように吠
えな！

男爵 バカ者！ おまえはなんだ——商人か？

それとも——酔っぱらってるのか？

ペーベル さあ、吠えな！ おれの氣慰みにな
るよ……おめえは旦那衆で……おめえには、
おれたちを人間とも思わなかったような……
また万事そういう……時代があった……

男爵 ふん、それで！

ペーベル まあいいや！ ところが今はそら、
おれはおめえに犬の鳴き真似をさせる、おめ
えはそれをやる……やるだろう？

男爵 ふん、やるとも！ この木偶！ そんな

ことが、どんなたのしみになるというんだ？
おれがおまえとおつかつなもものなってるこ
とをおれじしんが知っているのに。おれを四
つん這いにさせるんなら、おまえとは比べも
のにならなかつた時分にやればよかったんだ
……

ブブノーフ ほんとだ！

ルカー わしも言うよ——なかなかいい……
ブブノーフ あつたことは——あつたこと、の
こつたもなあ——つまらんものきり……ここ
に旦那衆はいねえ……みんな色が剥けて、

裸の人間だけがのこつた……
ルカー するとみんな平等だ……ところでおめ
えさん、男爵だったのかね？

男爵 それがなんなんだ？ おまえはだれだ、
化けものか？

ルカー 「笑ふ」伯爵もわしは見たし、公爵も見
た……だが男爵には——はじめて会いますよ、
それも尾羽うち枯らしたのに……

ペーベル 「ハハハッと笑う」男爵！ おめえは
おれにきまりわるい思いをさせたぜ……

男爵 もすこし惻巧になつてもいい頃だよ、ワ
シーリイ。

ルカー なるほど！ こうしておまえがたを
見ておると、みなさん——おまえがたの暮し
は——なんとまあ……

ブブノーフ 毎朝起きるがはやいか、吠えだす
ような、そういう暮しだ……

男爵 もつといい暮ししたよ……そうさ！

おれは……よく……朝目が覚めると、ベッド
に寝たまま、コーヒーを飲んだもんだ……コ
ーヒーを！——クリームを入れて……そう
さ！

ルカー でもやつぱり——人間さ！ どんなふ
りをしようと、どう逃げてみようと、人間と
して生まれたら、人間として死ぬ……そして
わしの見るところ、ひとびとはだんだん賢く、
だんだんおもしろくなつていく……暮しはだ
んだんわるくなつていくのに、ますますよい
ことをのぞんで……強情なもの人間と
いうものは！

男爵 爺さん、おまえはいったい誰だ？……ど
こから現われたんだ？

ルカー わしかい？

男爵 巡礼か？

ルカー わしどもはみんなこの地球の巡礼だよ
……話にきけば、わしらの地球も大空の巡礼
だそうな。

男爵 「きびしく」そりやそうだ、ふん、だが——
バスポートは持つてるか？

ルカー 「ちよつと間をおいて」おまえはだれよ、
スパイか？

ペーベル 「うれしげに」うまいぞ、爺さん！
どうだ、男公、一本やられたか？

ブブノーフ ん、そだ、まいったぜ旦那は……
男爵 「照れて」ふん、なにさ？ おれは、だつ
て……冗談を言ってるんだよ、爺さん！ お
れはきみ、じぶんだって書類なんぞ持つちゃ